

第3章

アジア拠点：モンゴル研修

原 順 子

(1) 目的

課題研究をモンゴルの高校生と協同で行う。新モンゴル高校の生徒と環境問題に関するディスカッションを行う。また、その成果を現地の政府関係機関、教育機関に報告し指導・助言をもらう。

(2) 実施方法

1) 参加生徒 モンゴルGlobal Committeeの高校2年生8名が参加

引率教員 原順子(学校代表)、三小田博昭、杉本雅子。現地で名古屋大学国際部職員合流

2) 事前学習

- ①2014年度、アソシエイト校の7月にGlobal Committeeを結成
- ②2014年9月：新モンゴル高校1・2年生と月1回の

TV会議を名古屋大学CALEで行う。

- ③2015年4月：新モンゴル高校と協同課題研究のテーマを「モンゴルの環境問題」に決定。
- ④2015年6月：テレビ会議で日本から「日本の四大公害病」、モンゴルから「モンゴルの大気汚染」「モンゴルのゴミ問題」を題材にあげる。
- ⑤2015年6月26日～30日：モンゴル語入門講座①
7月8日～10日：モンゴル語入門講座②
7月15日：モンゴルについての講義名古屋大学足立守先生

3) 費用

- ①学校負担分：国内移動に関わる費用、往復の航空運賃(空港使用料、サーチャージ含)、現地バス(含運転手)借り上げ、旅行保険に加入に関わる費用など
- ②生徒負担分：パスポート取得にかかる費用、現地宿泊ホテル代、食費など本人に関わる費用、セントレアまでの交通費など

(3) 研修内容

1) 日程及び宿泊先

日時	タイムテーブル	宿泊地
7月24日(金) (1日目)	8:42 名古屋駅発 新幹線 のぞみ110号 10:16 品川駅到着 14:40 成田国際空港発 MIAT OM502便(機内食) 20:10 ウランバートル国際空港着 入国審査 ・現地銀行で円→トゥグルクへ換金(2万円程度)	ホテル泊 (UBミシェールホテル)
7月25日(土) (2日目)	7:30 ホテルロビー集合(スーツケースはホテルに預ける) 8:00 ボルガン県サンサル村へ移動(車約6時間) ・エルテニゾー 博物館 16:00 サンサル村到着 サンサル村 学校訪問 歓迎会 ・課題研究(水質調査、大気調査の場所を探す) 19:00 ホームステイ先へ送迎 各自ステイ先で夕食	サンサル村でホームステイ (引率者はツアーリストキャンプ泊)
7月26日(日) (3日目)	8:00 ボルガン県サンサル村の学校集合交流・村長表敬訪問 ・課題研究(村の小川で水質調査、サンサルの学校玄関前で大気調査)	ホームステイ (引率者はツアーリストキャンプ泊)
7月27日(月) (4日目)	・アルタンボラク村へ出発(車約3時間) ・ホスタイツーリストキャンプ 出発(車約2時間) 午後 アルタンボラク村到着・課題研究適地調査(アルタンボラク村の水場で毎年調査できそうな場所を探す) ・遊牧体験(ステイ先のゲルで羊追いなど) 夕食(ゲルステイ先)	遊牧民ゲルステイ (引率者はアルタンボラク村付近ツアーリストキャンプ泊)

日時	タイムテーブル	宿泊地
7月28日(火) (5日目)	朝食・昼食(ゲルスティ先) ・遊牧体験(ステイ先のゲルで羊追いなど) ・課題研究(アルタンボラク村の小川で水質調査、水質検査と同じ場所で大気調査) 夕食(1つの遊牧民ゲルにて全員集まりホルホグ)	遊牧民ゲルスティ (引率者はアルタンボラク村付近ツーリストキャンプ泊)
7月29日(水) (6日目)	朝食(ゲルスティ先) ・騎馬民族乗馬体験 ・ウランバートルへ移動(車約3時間) 18:00 ウランバートルミシェールホテル着 夕食 市内レストラン	ホテル泊 (ミシェールホテル)
7月30日(木) (7日目)	8:30 ホテル出発(ホームステイに必要な荷物だけを持つ。) 9:00 モンゴル科学技術大学地質博物館 9:30 フィールドリサーチセンター ・課題研究の助言を受ける 10:10 モンゴル国立大学日本法センター ・モンゴルの大学生がゲル地区の大気汚染についてプレゼン→環境について討論 12:00 新モンゴル高校 昼食(カフェテリアにて) 13:00 歓迎会(互いの文化紹介) ・日本の四大公害病についてプレゼン→討論 ・課題研究(水質調査、大気調査)について話し合い 17:00 ホストファミリーと合流 各ステイ先へ	※ホームステイ泊 (引率者はミシェールホテル)
7月31日(木) (8日目)	8:30 新モンゴル高校集合 バス乗車 9:30 JICA 訪問:担当者Mrs.Maruyama Ayako 11:00 日本大使館訪問担当者Mr.Yamamoto Keigo 13:00 セルベ川についての事前学習(新モンゴル生徒と) 16:30 ホストファミリーと合流 各ステイ先へ	※ホームステイ泊 (引率者はミシェールホテル)
8月1日(金) (9日目)	朝食:生徒はホームステイ先、引率者はホテル 8:30 新モンゴル高校集合 セルベ川の河川清掃 午後 ホストファミリーと自由行動(昼食 各自自己負担)	※ホームステイ泊 (引率者はミシェールホテル)
8月2日(土) (10日目)	14:00 新モンゴル高校集合 日本人墓地(献花) 18:00 モンゴル民族舞踊見学 夕食	ホテル泊 (ミシェールホテル)
8月3日(日) (11日目)	6:30 ミシェールホテル出発(ミシェールホテルからバス) 8:55 ウランバートル国際空港発 MIAT OM501 便 13:40 成田国際空港着 16:44 東京駅到着 19:01 名古屋駅着 解散式後に解散	

2) G.コミッティーモンゴル課題研究構想

①目的

SGH5年間の課題探究でモンゴルは重要な海外拠点の1つ。そこで継続して課題研究を行い、成果を出す。27年度は初年度なので、データを採取する場所を決めたり、採取できるかどうかを試行することが目的。

②研究課題

『モンゴルの環境汚染に、日本の公害で経験したこと活かす』-高校生にできること-

③仮説

日本はかつて高度経済成長期に水質汚染、大気汚染が

深刻で公害が社会問題になっていた。すべてが解決されてはいないが、現在はかなり改善されている。モンゴルは現在高度経済成長期を迎えて、都市部(首都ウランバートル)の水質・大気汚染が問題化されつつある。公害を学習している日本の高校生と、これから環境問題を考えていくモンゴルの高校生が協同して環境汚染について調査・研究していけば、両国の持続可能な開発に有効である、と仮説を立てた。

④内容

i 水質検査と ii 大気検査をそれぞれ簡易検査器を持参して、現地の高校生と一緒に検査する。研究方法や考

察のアドバイスを、名古屋大学フィールドリサーチセンターの先生方に頂く。

⑤方法

モンゴルに行くメンバーを主に i 水質検査、ii 大気検査に分担し、担当する。同じ場所で5年間継続して採取する。水質に違いがあれば原因を探り、最善策などを探り、モンゴルの高校生と協同で出来るアクションプランを立てる

1年目：採取場所の決定、採取。規制の簡易検査器で出来る検査をする。

(場所の違いによる結果の違いはわかる)

2年目：採取。1年目と比較する。場所による結果の違いを仮説を立て考察する。

(1年目と結果の共通点、相違点はわかる)

有効な試薬のアドバイスがあれば検査物質を変更することもありうる。

3年目：2年目と同じ。地理的要素、産業的要素等から原因を探る。

4年目：3年目と同じ。

5年目：アクションプランを考える。

⑥採取場所候補地（5年間継続して同じ場所で採取できる場所）

- 日本 i 名古屋大学鏡が池もしくは本校中庭の池
- モンゴル i サンサル村（田舎）の川
- ii 遊牧地の水たまり
- iii ウランバートル（都市）セルベ川

3) 水質検査結果

①水質検査使用実験キット

- i 簡易水質検査器(パックテスト)河川用[内田洋行]
- ii 検査項目・ピーエイチ (pH)・化学的酸素消費量 (COD)・亜硝酸 (NO₂)・リン酸 (低濃度) (PO₄)・鉄 (Fe)・銅 (Cu)・亜鉛 (Zn)・全硬度 (C₃CO₃)

モンゴルの環境調査

水質調査

目的

- ・モンゴルの水を調査し日本と比べる
- ・手に入れたデータから、今のモンゴルの環境問題の状況を調べる

実験

方法
簡易水質検査器 河川用を使いpH,NO3,PO4,Fe,Cu,Zn,全硬度をそれぞれ調べる





結果

	pH	COD	NO2	PO4	Fe	Cu	Zn	全硬度
中庭	9.5	13	0.02	0.05				
サンサル村 タル二川	8.5	35	0.02	0.5	0.1	0.1	0.2	72
アルタンボラク	9.0	13	0.05	0.2	0.0	0.0	0.2	152
ウランバートル トール川	7.5	13	0.05	0.2	0.0	0.0	0.2	72

考察

- ・pH 日が当たり植物の炭酸同化作用でpHが上がったため
- ・COD,PO4 サンサル村は4日前に雨が降り、家畜の排泄物が多かったため
- ・CODの値から中庭、タル二川、アルタンボラク、トール川は魚が住みにくい環境であるとわかる
- ・今回の試薬ではあまり大きな差が見られなかったが、トール川の水は白く濁っていたのが確認できたので、違う試薬を使えば大きな差が出るかもしれない。



中庭で大気調査 (2106/1/29)



テレビ会議で大気調査の討論 (2016/2/2)

4) 大気汚染調査結果

①大気検査実験キット

大気成分検知器セットGV-50T [内田洋行]

1 図：モンゴルUBと名古屋市の大気汚染調査

		酸素 (O ₂)	窒素酸化物 (NO _x)	二酸化炭素 (CO ₂)	その他 ※
1・8月	日本*1	22%	反応せず	0.03%	反応せず
8月	モンゴル*2	21%	反応せず	0.03%	反応せず
1月	モンゴル*2	19%	0.5%	0.06%	反応せず

*・日本*1：本校の中庭 ・モンゴル*2：新モンゴル高校の玄関
 ※・一酸化炭素 (CO) ・アンモニア (NH₃)
 ・硫化水素 (H₂S) ・二酸化硫黄 (SO₂)
 ・塩素 (Cl₂) ・オゾン (O₃)

②テレビ会議

本校の中庭は 1月と8月は同じで問題の無い数値であったがモンゴルでは1月と8月の数値は異なった。冬のモンゴルはO₂が減り、CO₂が増えた。NO_xについては、人体に有害となる数値が出てしまった。モンゴルの高校生によると、原因はゲル地区の暖房、車の排気ガス、ウランバートル (UB) の地形が原因とのことだった。

i ゲル地区とは

ゲル地区とはUB周辺で、人々が勝手にゲルを建てて住み着いた地区である。社会主義時代、首都UBには、火力発電所から地下を通り、セントラルヒーティングを完備させた。ゲル地区は市外のためセントラルヒーティングはない。ゲル地区はUBに職を求めて各地から人々が集まり、人口増加が著しい地区である。今やUBに住む人の70%はゲル地区に住んでいる。ゲル地区、といっても現在はゲルだけでなく、マンションもある。ここでは安い質の悪い未加工の石炭で暖房をとることが多いため、CO₂やNO_xの数値が上がってしまう。

ii 車の排気ガス

モンゴルの移動手段は車が一般的である。鉄道は発達していない。遊牧民もかつては馬で移動していたが、最近はゲルをトラックに積んで移動することが一般的である。大きな道路はアスファルト舗装されているが、冬に凍結をして陥没することがあり、補修工事を常にしている。工事ができる時期も凍結しない夏の6～8月の3ヶ月で、砂埃が多い。交通渋滞も都市部では問題である。交通量を減らすために、モンゴルでは車のナンバーの末尾が奇数と偶数で交通規制している。例えば、月・水・金はナンバー末尾が奇数の車が道路を通行出来る、という具合である。冬の車の排気ガスは、大気汚染で歩くと危険なのでみんなが車を使い、排気ガスが多くなる、という悪循環だそうだ。

iiiウランバートル (UB) の地形

UBは盆地である。そのため空気が滞り、風で流れるということが無い。

この結果報告から、改善に向けて自分たちに何ができるか、今後テレビ会議で話し合っていくことを確認した。

(4) 検証評価〔参加生徒の振り返り〕

●今回のモンゴル研修の中で、たくさんの“モンゴル”を見て体験しました。まず、私たちが日本から来たということもあって、日本人がたくさんいるところに行き、モンゴルと日本の繋がりを感じました。そして、日本へ行きたいという強い意志を持った学生さん達を見て、刺激を受けました。また、田舎の



「モンゴルの少女」
生徒の旅日記より

方では、言葉も生活もまるっきり異なる世界で、驚きも止まりませんでした。例えばサンサルホームステイしたビンバーちゃんの家では、両親とも出稼ぎに出ていて、姉妹だけで生活しており、庭ではおじさん(お兄さんかもしれない)がコンクリートを作っていました。アルタンボラクでは水は川から汲んできて、拾ってきた燃料でご飯を作り、電気は太陽光発電と何かも自給自足の生活をしていました。ある意味では動物と平等というか、共生しているなど実感しました。最後に訪れたウランバートルは、まず車が多く空気が煙たいというのが本音でした。道路はボコボコだし、排水のシステムが無いし、いつも渋滞しているからか人々は少し穏やかではないように感じました。新モンゴル高校では、とても綺麗な校舎と皆さんが日本語が話せることに感動しました。ホームステイしたダシュカちゃんの家では、私の家と似た生活でした。モンゴルでは、その国の広さからか、生活スタイルが日本より多様だと思いました。日本ではゲルのような伝統的な家はもう数少ないですが、モンゴルではまだ現役でたくさんあります。民族舞踊や馬頭琴なども、サンサル村の高校でも新モンゴル高校でも部活があるそうです。そのような自国の誇りというのは素敵だなと思いました。

今回、大草原へ旅をして私の好きなものはやはり自然かな、と感じました。自然の中には動植物はもちろん、農業の方法、土壌、川の中身、人の生活に必要なものなどたくさんのものが含まれています。モンゴルの高校や

大学で出会った意識の高い人たちのことを思って、負けないくらいしっかり学びたいと思います。最後になりましたが、学校の研修の一環で11日間もモンゴルへ行って、一生忘れられない経験をさせて頂き、本当に本当に幸せです。機会を作って下さった方々、有り難うございました。



生徒の旅日記より

●僕が最初に決めた目標は、異文化を理解し、モンゴルの目線から環境問題を見て、実行しやすい環境対策を考えるということでした。これを達成できたかは少し微妙なところです。なぜなら、僕が思いつくような日常的で実行しやすい対策はすでに行われていたからです。例えば Facebook でアイスバケツチャレンジみたいなことをするなど、モンゴルではそういった市民活動がすでに始まっていました。僕の予想ではこの活動がモンゴルの若者に広まって、街のゴミ問題は改善すると思います。しかし、村などの観光地では外国人がゴミを捨てていると思われる場所がありました。そういった場所には、モンゴル語だけではなく、いろいろな言語で書かれている「ポイ捨て禁止」の看板を作るべきだと思います。サンサル村の村長さんが話していた、絵のついた大きな看板を立てるのもよい考えだと思いますが、やはり多様な言語で書くことも重要であると思います。なので僕が考えたのは、国内は変わりつつあるので、国外に対して対策を立

てることがモンゴルのゴミ問題の解決に繋がるのではないかとということです。

他にもモンゴル研修で学んだことは多くあります。モンゴル人は力強くでおおらかな性格をしていることや、中国とロシアに挟まれて苦勞していること、チンギス・ハンが予想以上に尊敬されていること、サンサル村の人はバレーボールがすごくうまいこと。



生徒の旅日記より

また、ゲルに住んでいる遊牧民は暇なときはずっとテレビを見ていること（ゲルにソーラーパネルがある）など、日本に居てインターネットで調べるだけではわからないことを学ぶことができたと思います。ご飯があまりおいしくなかったり、トイレが汚かったり、地面が整備されずにぼこぼこだったり嫌なこともありましたが、それらをひっくるめてよいモンゴル研修だったと思います。楽しかったです。

●私はこのモンゴル研修でいろいろなことを経験し、人として大きくなれた気がします。異文化であるモンゴル、始めは受け入れがたく、どうなるのか不安でした。特にゲルスティは印象に残っています。ゲルではものの大切さを感じたり、人の優しさというのを感じました。モンゴルの人のおもてなしは素敵でした。食べ物もゴミが骨しか出ないほど無駄なく処理していました。また、ウランバートルでは交通についてや雨の認識など、驚くことが多々ありました。日本の交通についての意識とは全然違うなと思いました。やはり意識というものは環境が影響してくるし、意見や考えなどにもつながるなと感じました。雨の認識については雨が降ると気持ちが沈むし、あたりたくないと思いますが、モンゴルではあまり雨が降らないので皆嬉しそうでした。実際に私も雨と雷の中でバレーボールを屋外でしました。気候の違いも意識の違いに繋がると思いました。日本が常識と思っていたことがモンゴルに行くと幸せなことなんだと改めて感じました。

私はモンゴルの人たちの優しさは日本人よりもすごいと思います。ゲルでは絶対お菓子を出したりするし、初対面の人も上手にモンゴルの人は交流します。言語が通じなくてもそんな優しさに触れてとても心が温かくなりました。モンゴルに行っているいろいろな人と出会い、世界が広がりました。私は英語は苦手なので勉強したくありませんでした。でも、世界で活躍する人になりたい、とモンゴルに行くと思いました。英語の学習を頑張ろうと思いました。本当にいい刺激になりました。行けてよかったです。仲間とこれからも交流していきたいです。

●長いようで短い 11日間がもうすぐ終わってしまうが、とても楽しかったのでよかった。まずは今回の目標について、僕が目標として挙げていたのは「語学能力の向上」と「異文化の理解」である。まずは一つ目について。この旅の間、田舎では常にトイギー（英語が堪能なモンゴルの高校生）と一緒にだったので、ずっと英語でたまに日本語といった感じで過ごしていたので、英語の能力は上がったと思う。日常の会話で特に問題なくできるようになったが、映画などをしっかり理解するのはまだ難しいので、これから伸ばしていきたい 生徒の旅日記より



と思う。英語は他の人より多く話す機会があったので、よかったと思うが、モンゴル語は他の人より話す機会が圧倒的に少なかったと思う。挨拶ぐらいしかモンゴル語は使っていない。将来、自分はロシア語も使わなければならないような仕事をしたいと思っている。モンゴル語はロシア語と同じキリル文字なので、もう少し頑張ればよかったと思う。それにしてもやはりまずは英語なので、英語を話す機会が多かったのはよかった。

次に二つ目について。モンゴルに行く前は正直悪いイメージの方が強かった。なぜならトイレが無かったり風呂が無いと聞いていたからだ。実際にそれらは無いのだが、いざ、行ってみると以外とどうにでもなることに気づいた。最初は少し抵抗があったが、慣れてくると特に何も気にしなくなった。これは大きな発見だと思う。正直、今後の自分はどこでも生活できそうな気がする。また、ウランバートルと日本ではあまり大きな違いは見られなかった。ただ、道路の状態やアパートの数など、細かい違いは多々ある。

以上のように当初の目的はある程度果たせたと思う。モンゴルでは多くの素晴らしい出会いがあり、素晴らしい経験ができて本当によかった。空港ではこれで終わりだと思っていたが、飛行機の中でもとてもよい出会いがあった。席が隣だった方と最初はモンゴルについて話し合っていたが、途中から夢の叶え方について教えて頂いた。今後の勉強のモチベーションにもなると思う。旅の最初から最後まで本当に素晴らしい経験ができた。

(文責 原 順子)

SGH 研究開発単位Ⅲ 海外拠点活動

SGH 課題研究発表会



2015 光粒祭 輝く授業展にて『モンゴル研修 課題研究』 報告

————— 遊牧民のゲルを移設して、模擬モンゴル体験の中でのポスターセッション —————

SGH 初年度のモンゴル研修。これまでの親善交流から一步深めて、今年はモンゴルの 2 つの高校と協同で水質検査や大気検査に取り組みました。もちろん、モンゴルならではの遊牧民ゲルステイで遊牧体験も出来ました。光粒祭では、課題研修の成果やモンゴルの文化を本物のゲルの中で報告しました。来場者はゲルの中の美しさに驚いていました。モンゴルではゲルの中をとて綺麗に飾り立っています。遊牧民は合理的で優れた文化を持っています。

1. まずは前日に、グローバルコミッティーの生徒たちがゲルを建てます。

ゲルの建て方を教えてくれるのは本校の先生たち、先生達は事前に名古屋大学のモンゴルからの留学生からゲルの建て方を教えてもらっていました。モンゴル人のすべてがゲルを建てられるわけではありません。首都ウランバートル出身の若者は建てられなくなっているそうです。地方出身の大学生に仲間を集めて頂きました。



①



②

①伸縮性のある斜め格子材を 4 枚繋げて円にする。

・ 出入り口のドアも取り付ける。(これを『4 枚壁のゲル』という。格子材を何枚繋げるかでゲルの大きさが決まる。

・ 円の真ん中に 2 本の柱とその上に丸い屋根柱を立てる。

②屋根材を格子と屋根柱に突き刺して固定する。格子壁が真円でないと 1 本固定すると反対側の屋根材が落ちてしまう。



③

③屋根や壁になるビニールシートをかぶせる。モンゴルでは木材とシートの間に分厚いフェルトをかぶせるが、蒸し暑い日本では省略。



④

④格子の内側から飾り布を留めていく。ベッドもゲルの中で組み立てる。遊牧民の内装はとても豪華。美しく刺繍を施した飾り布がどこのゲルでも見られる。

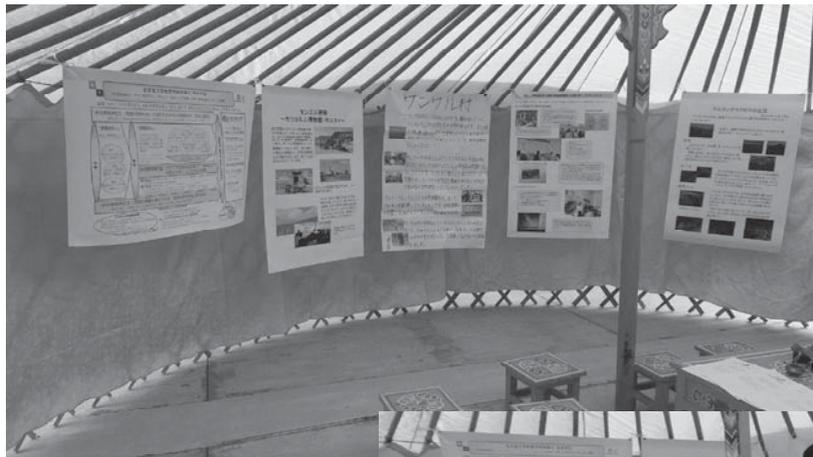


⑤

⑤シートが飛ばないように黒い紐で固定して出来上がり。かつてこの紐は馬など家畜の尾の毛に「より」を掛けて作っていたそうだ。これはナイロン製の紐。ゲルの中が暑いので壁シートの裾をまくっている。天井も開けている。実際にモンゴルでもこのようにして暑さを調節している。

ちなみに「ゲル」とはモンゴル語で「家」。キリル文字では写真のように表記する。

2. 光粒祭当日の様子



⑥生徒のポスター

⑦モンゴル版チェスに興
じる生徒



⑧課題研究のポスターを見入る
生徒

⑨ちびっ子にも大人気

中に入りきれなかったお
客さん用に、椅子を外に出し
て待ってもらっていました。



3. ポスターの内容

JICA

1.概要
 独立行政法人国際協力機構(英: Japan International Cooperation Agency)は、独立行政法人国際協力機構法に基づいて、設立された外務省所管の独立行政法人。政府開発援助(ODA)の実施機関の一つであり、開発途上地域等の経済及び社会の発展に寄与し、国際協力の促進に資することを目的としている。



2.JICAの支援ツール

- ・技術協力・・・専門家の派遣や研修員の受入れなど
- ・有償資金協力・・・長期間かつ定理の緩やかな条件で開発資金貸し付ける。現在モンゴルでは、3件のプロジェクトが進行している。
- ・無償資金協力・・・返済の義務の生じない開発資金の供与。

3.ウランバートルの大気汚染について
 ウランバートルの大気汚染はWHOの発表によるとイランに次ぐ世界第二位のとても深刻なものである。

-原因-

- ・石炭を使用する火力発電所
- ・ゲル地区の一般家庭(図1)
- ・自家用車やバス



図1

-対策-

- ・ウランバートル市大気汚染対策能力強化プロジェクト
- ・発生源の分析、対策の検討、実施 など
- ・環境教育
- ・市民の環境に対する意識を向上するため

モンゴルの環境調査

水質調査

ロジック

- ・モンゴルの水を調査し日本と比べる
- ・手に入れたデータから、今のモンゴルの環境問題の状況を調べる

実験

方法
 簡易水質検査器 河川用を使いpH,NO3,PO4,Fe,Cu,Zn,全硬度をそれぞれ調べる





結果

	pH	COD	NO2	PO4	Fe	Cu	Zn	全硬度
中庭	9.5	13	0.02	0.05				
サンサル村タルニ川	8.5	35	0.02	0.5	0.1	0.1	0.2	72
アルタンボラク	9.0	13	0.05	0.2	0.0	0.0	0.2	152
ウランバートルトル川	7.5	13	0.05	0.2	0.0	0.0	0.2	72

考察

- ・pH 日が当たり植物の炭酸同化作用でpHが上がったため
- ・COD,PO4 サンサル村は4日前に雨が降り、家畜の排泄物が多かったため
- ・CODの値から中庭、タルニ川、アルタンボラク、トル川は魚が住みにくい環境であるとわかる
- ・今回の試薬ではあまり大きな差が見られなかったが、トル川の水は白く濁っていたのが確認できたので、違う試薬を使えば大きな差が出るかもしれない。

アルタンボラク村での生活

高校2年A組 21番 五藤花

アルタンボラク村は、首都ウランバートルから車で約2時間北に行ったところにあります。

全員が、実際に遊牧民の方が住んでいるゲル(移動式住居)にホームステイしました。



家畜
 どのゲルでも、大体馬、牛、ヤギ、ヒツジを飼っています。
 屋間は放牧され、夜になるとゲルの近くに集めたり、囲いに入れたりします。朝は、まず家畜を放牧するところから始まります。



食べ物
 左下の写真はホルホグというモンゴルの代表的な肉料理の一つです。
 右上の写真はモンゴルのチーズで、ピヤスラクとアロルです。その他、アイラグ(馬乳酒)を飲んだり、揚げパン、ホーショルや干し肉入りうどんなどを食べたりしました。



村の人々
 アルタンボラク村では、日本語も英語も通じません。しかし、村の皆さんは私たちがまるで家族のように受け入れてくださいました。モンゴルでは昔から知らない客人でも温かく受け入れる習慣があるそうです。
 今まで当たり前になっていた、目に見えるモノの大切さ、そして目に見えないものの大切さも強く実感しました。



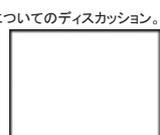



日本法教育研究センター

- ・日本法教育研究センターは、日本語と日本法の教育を行い、優秀者を名古屋大学への留学生として送り出すほか、法学教育研究分野におけるモンゴルと日本の架け橋としての役割を果たしています。
- ・私たちはこちらで、モンゴル国立大学法学部の学生さんたちと、活動を行いました。

活動内容

- ・私たちが準備してきた日本文化の紹介の発表
- ・モンゴル国立大学法学部の学生さんたちからの、「ウランバートルにおけるゲル地区の土壌汚染問題」についての発表。
- ・日本、モンゴルの環境問題についてのディスカッション。




日本文化の紹介では、日本の文化・学校生活などを紹介することができ、モンゴルの学生さんの方にも、わかりやすく説明をすることができました。
 また、学生さんの方からの発表を聞き、改めて、土壌汚染の深刻さを知り、私たちにもできることはないかと考えることができました。

日本人墓地跡記念公園

第二次世界大戦終戦後の1945年10月、ソ連シベリアに抑留されていた旧日本軍人の60万人のうち、1万2318人がモンゴル政府に引き渡され、2年間、同国各地で強制労働をさせられていました。このうち1500人以上が、帰国への悲願もむなしく、異郷でお亡くなりになりました。日本人墓地跡記念公園はその方たちを慰霊する場所です。



ここを訪れ戦争の怖さを感じると同時に、平和の幸せさ、ありがたさを感じました。